

DHARMA EYE



法眼

日系ブラジル移民100周年と 南アメリカ国際布教総監部開設 並びに両大本山南米別院佛心寺 創立50周年記念式典について

采川道昭

南アメリカ国際布教総監

本年はブラジル移民船最初の笠戸丸が、1908年にサントス港に入港してよりちょうど100周年の記念すべき年に当る。本年行われる記念の公式事業は50以上にも上っている。

移民第一陣は100年前のことであるから、当時を知っている人は既に数少なくなっている。幼少のころ、笠戸丸で渡伯した最初の移民の生き証人も既にこの世に居ない。しかしながら、貴重な写真等の記録や子孫に語り継がれた記憶によって当時を偲ぶことはできる。

私は横浜にあるJICA(国際協力機構)の移民資料館で初期の移民の方々の資料を拝見して、強烈な印象を受けた記憶がある。資料館の方の説明では、日本からの持参品の中で何が一番役に立ったかという質問に対して、楊行李と浣腸器だという答えが返ってきたそうである。楊行李は赤ん坊を寝かせて野良仕事に行くとき便利であり、浣腸器は子どもが病気を罹ったとき、まず浣腸をして、それから数時間かけて町の医者まで連れて行くのに不可欠の道具だったというのだ。

ともあれ、初期の移民者は奴隷と変わらない生活を強いられていた。実際雇い主の処から逃げ出したりしようものなら、射殺されても文句が言えない時代であった(奴隷制度が廃止になってから、移民が奴隷の代替として重労働を強いられたのだ)。

そのような中で移民の人々の心の支えとなっていたのは、信仰の力であろう。多くの家族がご先祖の位牌を抱いて渡伯しているのを見てもうなずけることだ。日本人である

という誇りと、ご先祖が見守る中で、代々受け継がれてきたいのちを、新しい大地で開花させるのだという気概があったればこそ、多くの艱難辛苦に耐えることが出来たのだろう。

そのような中で、第二次世界大戦後にようやくカトリック以外の宗教も認められるようになった。我が宗では、昭和30年、時の曹洞宗管長であらせられた高階瓊仙禅師が約二ヶ月かけてブラジルをご巡錫された。禅師は、大学などで一般ブラジル人に布教伝道されると同時に、日系の曹洞宗の人々をまとめられた。禅師は御歳80歳であられたにも関わらず、一日に数回ご説法をされ、次の予定地へ移動されるというハードな日程を精力的にお勤めになられた。現在、ブラジルにある曹洞宗寺院建立の基礎はこのご巡錫でつくられたのだ。禅師は10年後の御歳90歳の時にも再度ご巡錫され、10年前にもジダスクルーゼスで入仏式をされた禅源寺以外に、サンパウロの佛心寺や、ローランジャーに曹洞宗の寺院が立派に建立されたのを見届けられている。禅師の最初のご巡錫から一年後に、新宮良範老師が初代の南米総監として赴任され、約30年間の長きにわたってその任に当られた。

さて、日系の人々も、二世、三世と世代が下るにつれて、日本語の理解度は薄れ、それに反比例して、自分達はブラジルで生まれたのだからブラジル人であるという誇りが増大していく。それは当然のことであろうし、宗教についても個人の自由であるから必ずしも先祖の宗教を受け継ぐということは無い。また非日系の人との婚姻も進み、家族の中でそれぞれ信仰している宗教が異なるということも、極めて自然なかたちで行われている。ただ、熱心なカトリック国であるブラジル人は両親の宗教(仏教)に対して多大な敬意を抱いている。だから、自分たちはキリスト教であっても、両親のお葬儀や法事は両親が信仰していた宗教で行うという人が多い。

ところで、最近の日系人はブラジル社会の中で活躍の場を広げ、大きな力を持ってきているが、一方先祖のお位牌

を寺に預けて日本に出稼ぎに行くという現象や、キリスト教徒になったり、新興宗教に入信したりして仏教離れが進んできたが、逆に西洋の人たちが仏教に興味を持ち、坐禅や法要に参加する人たちも増えてきている。これはなにも南米だけに限ったことではないだろう。欧米諸国ではキリスト教に飽き足りない人たちが、坐禅を通して仏教、特に禅に興味を持ってきているが、南米もその流れの中にある。南米で異なる点は、坐禅だけでなく、種々の法要にも多大な興味と関心があるということだ。例えば、施食会、羅漢供養、布薩などの儀式に喜んで参加する人が多い。中には結婚式や、赤ちゃんの洗礼を仏式で行って欲しいという人も最近増えてきたことだ。さらに、坐禅時の脳波の研究から、スポーツ医学や精神医学の面でも研究がはじめられており、今後の仏教、とくに曹洞宗の教えに対して、明るい未来を示唆するものだとと言える。

この総監部設立、及び両大本山南米別院創立50周年をご縁と受け止めて、この機に記念事業として、坐禅堂、開山堂、及びホールなどを備えた新館の建設に着手した。特に、坐禅堂建立は歴代総監方の夢でもあったので、是非とも完成して、人材育成と宗門の更なる飛躍に貢献したいと願っております。日本、及びブラジル国内外から記念建築事業に対する多くの賛助者を得ており、心から御礼申し上げます。

自分の様子、それが禅

石川光学特派布教師
千葉県・広徳寺住職

2007年10月4日 7:15 pm. グリーンガルチファーム

"My name is Kogaku Ishikawa. I am glad to see you"英語はここまでです。

今日、ここに、多勢の方がお集まりくださり、ほんとうにありがとうございます。外から眺めると、一人の私が、たくさんの方々にお話しているように見えます。でも、みなさんは、となりの人の分まで聞くことはできないし、聞いたことを他の人の分まで受け止められません。たくさんの方がいても、聞いている自分は1人です。そういう意味

で、私はたくさんの人にお話ししているのではなく、この中のたった1人のあなたにお話しています。むしろあなた1人にこの話を伝えるために日本から来たといっただけでしょう。1人の私と、周りにどれだけたくさんの方がいようとも、1人のあなた。これは、1対1の関係です。

さきほど、たいへんおいしい食事をいただきました。グリーンガルチファームの生活は快適ですか？このような素晴らしい環境の修行道場で坐禅をする、法の話や、考える、経典を読む。みなさんの中には、僧侶のように衣を来て、髪の毛を短くしている方もいらっしゃる。

では、みなさんにお尋ねいたしますが、ここでは一般の方と僧侶の違いはいついかなんでしょか。姿も生活もほとんど違いがないように見えます。どこが違うのでしょうか。では僧（とくに禅の修行僧）と一般の人とは、姿や生活が同じだとしたら、何が違うのでしょうか。

私は、さきほどいただいた食事のあらゆる生産に関わっていません。種まき、収穫、切って、焼いて、味をつける。なにも調理をしていません。それでもいただける。この着ている衣、衣服の糸も布も作り出していません。それでも着ていられます。どうして食事をいただけ、衣服を着ることができのでしょうか。

得度式といって、僧になるとき唱える言葉があります。意味は、「流転する三界に生きているのだから、恩愛（愛する人への執着）は断ち難きものである。断ち難き思いを棄てて、無為（縁とひとつになる。自分の我をさしはさまない）道を求めることこそ、本当の報恩の人だ」です。

修行する人には、布施（食べ物や衣服を与える）をしてくれます。だから、「僧となった方は、真実の法を得るために、身命をかえりみず修行してください」ということです。その覚悟がありますか？そういう気持ちで修行していますか？これが僧に問われているのです。

百尺竿頭更に進歩（たいへん長い棒の上に登る。足が離れれば死ぬ。だから、強くしがみつく。それをさらに一歩を進めというのは、自分の身命まで、すべてを投げ捨てて修行しなければ道を得ることはできない）と言われていのです。これが僧です。「一般の人が姿や生活を、たとえ真似することができたとしても、真似できないことを僧

はしているのだから、どうぞしっかり修行してください」と布施してくださるのです。

迷わないということは難しいことです。しかし、この道を行けば必ず「自己」に出会う、自分のありのままの状態に気がつく。これを「道を得る」といいます。このことを疑わず進んでいく、ひたすら邁進する人が僧です。

しかし、この本来の自分を知るということは、僧だけができることではありません。あなたが、いつでもどこでもできることです。自分自身が道であり、禅であります。ということは、道とか禅といわれるものは、いまの自分の状態そのもののことです。今の自分の状態？という貪りという欲、怒り、愚痴（不平、不満）ばかりじゃないかという方がいらっしやるでしょう。仏教では、これを三毒の煩惱といっています。これは、煩惱という名前をつけた自分の状態。煩惱という道、禅であるのです。

私は、今年の4月に顔の右側の神経が麻痺する病気になってしまいました。右の目が開かなくなり、唇の右側が下がってしまって、顔が曲がってしまいました。アメリカに来て、お話しをする時に、「私の写真を送ってくれ」と言われました。私は今では元に戻りました。ところが、「写真を送ってくれ」と言われた時には、顔が曲がっていました。この写真を送って、10月にみなさんに会った時に、「顔が違う」と言われるのではと思いました。それで考えて、私は10年前の写真を送りました。その写真は、私の10年前の写真です。だいたい治りましたが、今でも食事をするとき涙が出てきます。特に、おいしい食事を頂くと涙がボロボロと出てきます。さっき、食堂で私は夕飯を食べました。その時は、涙が止まりませんでした。

今日は、禅のお話ということですが、男と女の欲の話をします。日本でこの話をしても、ほとんどの人がわかってくれません。日本で、男と女の欲は、抑えつけなくてはならない、ストップしろ、消せ、もっと別のことにエネルギーをつかって、そういう思いを発散させると言われております。私は、男と女の欲を消せという話をしません。今日お話しすることは、さきほど食事をしていて気がつきました。ですから、この話を聞くのは、世界で皆さんが初めてです。

私が、禅の指導者から話を聞いた時に、このように言われました。「わかってもいいし、わからなくてもいい」。

「わかってもいい」というのはわかりませんが、「わからなくてもいい」という言葉は、ずーっとわかりませんでした。その意味がわかったと思う時は、何度もありましたが、それは全部わかっていませんでした。私がこの意味がわかるまでに20年かかりました。今日のみなさんが、たった1時間でわかってくれたら、本当にうれしいです。この中の1人でもわかってくれればうれしいです。もしかすると、誰もわからないかもしれません。でも、20年たったら、誰かわかるかもしれません。

男と女の間にある欲の戒を「不淫欲戒」と言います。今、外の道を誰かが歩いているとします。私が、「あっ、あの歩き方は女の人だ」と思ったとします。私が「女の人だ」と思った時に、「私が戒を犯している」と言われました。みなさんこの話の意味がおわかりになりますか？ 私は女性を見てもいません、話してもいません、もちろん触れてもいません。女の人への気配がすると思っただけで、私が戒を犯していると言われました。なぜ、女性だと感じるのですが、戒を犯すことになるのでしょうか？ これは、反対の立場でも言えます。ここに女性が座っていて、男の人が歩いているとただ感じるだけで、戒を犯したと言えます。私は、初めてこの話を聞いた時に、まったく意味が解りませんでした。

禅には公案というものがあります。これからお話しする公案は、大変有名なものですから、みなさんも何度か聞いたことがあるでしょう。

ある田舎に、おばあさんが住んでいました。そこに禅の修行僧（男性です）が訪ねて来ました。その修行僧は、「ここで修行をさせてほしい」と言ったので、おばあさんは小さな家をその修行僧に与えました。修行僧は、そこでずっと坐禅をしました。おばあさんは、その修行僧のために、三度三度の食事を若い17、8歳の女性に運ばせました。やがて20年が経ちました。おばあさんは、“もうそろそろこのくらいでいいだろー”と思い、ある考えを若い女性に告げました。食事を持っていった若い娘は、突然、修行僧に抱きつきました。そして「こういうことをしたら、あなたはどうなりますか？」と尋ねました。修行僧は答えました。

「枯れた木が、冷たい岩壁に寄りかかっているようなものだ。最も寒い冬には少しのぬくもりもない。私はあなたがいくらなにをしようとも、何も感じないよ。」

これは、若い女性に対して、修行僧の心は少しも動かない、性欲を起こすことは無いという意味です。帰ってきた若い女性におばあさんは聞きました。「修行僧はおまえが抱きついたら、どうなったかい?」。若い娘は、先程の話しをしました。そうすると、おばあさんは怒り、「私は見損なった。20年もの間、こんな俗物、どうしようもない僧を養っていたのか」と、修行僧を追い出してしまいました。そして、修行僧の住んでいた小さな家に火を付けて燃やしました。話はこれで終わりです。

たったこれだけの話が千年以上も伝わっております。この話の意味は何でしょうか? 修行僧は、抱きついてきた若い女性に対して、「一番寒い冬の固い岩壁に寄りかかった枯木だ。欲は、起きない、何も感じない」と言った。それで、おばあさんは怒って、追い出し家を燃やした。それでは、修行僧はどういう反応をしたら良かったのでしょうか? 私は最初、「私もあなたを愛している」と言って、愛しあえばいいのかと思いました。それもおかしいと思い、ずーっと考えました。私が若い頃、日本の有名な禅の指導者は、このように言いました。「修行僧はもう悟りを開いている。悟りを開いているから、女性の誘惑に何も感じなかった。悟りを開いている修行僧に対して、そういう女性に誘惑をさせたおばあさんのほうが悪いと言いました。」私はその時にこう思いました。もしその答えが正しいのであったら、千年以上も長くこの話が伝わるはずがないと思いました。

坐禅の時、よく私たちは「何も考えないこと」と言われます。「考えてはいけない。考えてはいけない。考えてはいけない。」と言われます。そうすると、私たちは一生懸命「考えてはいけない。考えてはいけない。考えてはいけない。」と言い聞かせます。頭の中は「考えてはいけない」という考えでいっぱいです。

もう一つ中国の古いお話を紹介します。これも有名な話です。

ある人が心の状態を表す時に、「心は鏡だ」と言って、鏡に埃が付かないように常に払いなさいと言いました。これはさっきの坐禅の話と同じです。考えてはいけない、考えてはいけない、と自分の心に埃が付かないように、付かないように、しているのと同じです。まるで坐禅は、鏡に対して埃が付いたところを払う箒のようなものです。坐禅

を箒にしているのです。もう一人の人はこう言いました。「鏡というものは、元から無いから、最初から埃は付きようがない。」と言いました。私は、この二つの答えをずっと考えていました。埃とは汚れたもの、嫌なものという意味です。埃が付かないものとは、一体何でしょうか? 埃が付かないものを私は探しました。はじめ、私は自分が川になれば良いと思いました。川になれば、埃はすぐ流れていきます。でも流れても流れても埃は川に入って来ます。次に私は、自分が海になれば良いと思いました。埃が海に入れば、海の中に混じってしまいます。それでも、海に埃が付くということは事実です。それで、私は自分を空気にすれば良いと思いました。空気ならば、埃がどこにあるかわかりません。でも、目に見えませんが埃は小さくあります。最後に私は、自分が風になれば良いと思いました。風になれば、埃は飛ばされます。でも、今の考えは全部間違いました。埃が付かないものとは一体何でしょうか? それは、自分が埃と一つになることです。全部世の中が埃だったら、埃でないものが無いのです。埃が埃に付くことはありません。埃が埃に変わりません。今日、この部屋の中には女性もいますし男性もいます。もし世界中の全員が男の人だったらどうでしょうか? 世界の人が全部男の人だったら、女の人はいないということです。女の人がいないということは、男の人もないということです。男とは女に対して言っているだけです。これは、世界の人が全部女の人だったとしたら、男の人がいないのと同じです。男の人がいないということは、女の人もないということです。もし世界の色が白しかなかったとしたら、全部が白い色だったとしたらどうでしょうか? 黒がありません。黒が無いということは、白もありません。わかるとわからないも同じです。世界が全部わからないとしたら、わかるが無いのです。わかるが無いと言うことは、わからないが無いと同じです。

仏教の中には、「布施」と言う大切な教えがあります。私があなたにあげるとみんな考えます。「あげる」だけだったらどうでしょうか? 自分がなかったら相手もいません。自分が自分に何かを上げるという意識はありません。自分があるから、他人がいるのです。修行僧が女性に対して、欲しいという欲だけだとしたら、欲だけです。私があるあなたを欲しいと言うのは、私を認めた欲です。私がいなければ、あなたもいないのです。

仏教の言葉で「煩惱即菩提」という言葉があります。例えば、コップの水が汚れているとします。それをきれいに

するためには、一回コップの水を捨てて、きれいな水を入れます。これは煩惱即菩提の意味ではありません。世界中が全部汚れていたとしたら、きれいが無いのです。きれいが無いと言うことは、汚れているも無いのです。それだけ、その一つだけということは、対立するものはありません。

日本の禅僧で瑩山禅師という方がいました。瑩山禅師は師匠から法について、道について尋ねられました。その時に、瑩山禅師はこう答えました。この部屋はライトがついていますが、この部屋が真っ暗だったとします、真っ暗な中を黒い玉がピューッと飛んでいるようなものだと言いました。これは一体どういう意味でしょうか？ 暗い部屋を白い玉とか、赤い玉とか、青い玉が光れば、それは黒い色と対立しています。暗い部屋に黒い玉が走ると言うことは、境目が無いと言うことです。一つになると言う意味です。対立してないという意味です。黒に染まらないためには、一体何色になれば良いのでしょうか？ 私たちは、黄色とか、白とか、赤とか、黒ではない色を考えます。染まらないのは黒です。黒はこれ以上黒に染まりようがないのです。

禅の心は一つです。考えないようにしようという思いも余計なものです。自分の心に感じるまま、そのまま放っておけばいいのです。

修行僧と若い女性の話の公案は、自分があるから相手を認めたという関係です。自分が相手を欲しいという欲だけになったとしたら、相手はもう要りません。自分も要りません。その欲だけになったとしたら、その欲はやがて消えていきます。それは、皆さまが坐禅の中でのいるんな思いが出てくる、出では消える、出では消える、これと同じです。この公案は、修行僧が女性にたいしてどういう対応をすればよかったのかという答えを、みなさんに求めているのではありません。私たちに問題意識を起こさせて、認識にこだわっていることに気づかせてくれるのです。「女性に近づきたい、仲良くしたい」こういう考えは善くないので棄てなければいけないという思いは、自分が他人を認めることによって起きた認識です。「欲しい」という状態だけになったとき、これは煩惱そのものです。思ったことは思ったままですべてです。その自分の様子をそのままにするということです。

若い女性に抱きつかれるという「縁」によって現われた相(状態、様子)そのままが縁起の法です。法は、こういう考えはいけないという判断、分別が入る隙がないので

す。なぜなら、そのときの状態だからです。そして別の縁によって、常に変化していくのです。「縁起の法」は、人の思いや価値判断の働きとは関係がありません。人の状態、様子が縁起の法です。

私たちの心の様子には、欲が出るという状態があります。このために悩み、苦しむのです。でも欲がなければ、今日のみなさんも私の話を聞きにこられなかったでしょう。「聞いてみたい」という欲が起きたから、ここに来たのです。欲を出すという自分の状態、欲という煩惱の道であります。

みなさんは、石川光学(私)の顔を見ていますが、自分が光学を見ているという、自分ということ認めずに見ているのです。修行僧は、女性に対して欲を起こした「私」をなんとかしよう、「冷たい岩にしよう」として、わざわざ変えているだけです。なんとかしなければいけない「私」など、どこにもありません。ただ欲だけがあるのです。苦は苦のまま、楽は楽のまま、欲は欲のまま、自分の価値判断、好き嫌いを入れることはできないということです。

自分自身のいまの様子を明らかにする。はっきり知る。これが禅です。女性に対して欲を起こすという今の事実は、縁によって生じたものです。縁によって、生まれたり、滅したりする事実は、人の考えで操作し、取捨するものではありません。このことに疑いを持たないことです。疑うから、今の様子を自分の価値判断で、「取りたい、捨てたい」という思いに悩むのです。

縁により生じるもの「欲」は、人にはどうすることもできません。だから、「欲」の働きのままに、ほっておけばいいのに、人の意識がそうさせずに、なんとかしようとする。若い女性が抱きついてくるという縁の結果として、欲が起きる。だから欲という結果と一つになると、欲が無くなるということです。欲という事実を引き寄せたり、払ったりしない。掴もうと思っても、縁が消えれば、自然と去っていきます。どんなに素敵な女性でも、いつまでも永遠に自分に仕えてくれません。それと同じです。

生老病死という自分の様子も、好き嫌いでなんとか変えようしないことです。

以上

2007年禅道尼苑における 宗立専門僧堂体験記

ナス雄仙

スペイン・清久寺（トリエ道光徒弟）

弟子丸泰仙老師によって創設された禅道尼苑において、曹洞宗僧侶の養成を目的とする、日本国外では初めての宗立専門僧堂がヨーロッパで開単されるとの情報が流れた時、多くのコメントがなされた。既に日本の僧堂で安居経験をした者を除いては、誰も何がどのように起こるのかわからないにも関わらず、賛否両論の意見があった。ただ、みんなそれぞれ、歴史的とさえ言える重大な行持がおこなわれ、それが既成の体制を変革するものであることは認識していた。当初、私は賛成でも、反対でもなかった。しかし、ヨーロッパ国際布教総監部の横山泰賢師から私も参加する気持はないかと尋ねられた時、禅道尼苑の責任者としてこれを拒むわけにはいかなかった。

宗立専門僧堂の準備、及び9月15日に行われた開単式には多数のヨーロッパの伝道教師の参加のもと、無事、執り行なわれた。しかし、その日恒例の記念撮影も終わり、各自自室に引き上げた時から雰囲気は一変した。安居の当初からその主調が奏でられた。全てをもう一度初めから習得しなければならないのである。起床から就寝まで、全てが新しいことづくめであった。

最初のショック、それは33年の修行を経た後、再び修行僧として黒い袈裟を身に着けることであった。「初めての坐禅をいつも思い出しなさい。初心を忘れてはいけません」弟子丸老師がいつも繰り返していたこの言葉が胸に甦った。今まで初心を忘れないことは易しいことだと思ってきた。師の言葉を思い出すだけで充分であったからである。しかし、これは大きな間違いであった。何年もの間、この幻想の中で生きてきたのだ。この初心を忘れぬ精神とは選択の問題でもなければ、美しい思想からやってくるものでもない。体と精神が一つとなって、真に初心者としてその状況を正しく生きる時、この精神が現われるのである。もはや何も知ることも無く、いかなる指標も無く。一瞬たりとも空白の時間の無い世界に身を浸した私の全意識は、瞬間々々に向かって集中された。これは好むと好まざるとの選択に関わるのではなく、道元禅師の言葉にもあるように、

「かくして精進を重ね、念頭の火を消さなければならない」からである。

週を重ねるにつれ読経の仕方、そして法式進退が上達し、それらは美的にさえなってきた。間違いなくこなせた進退も、次にやったときには必然的に惨憺たる結果をもたらし、私達は元の位地に立ち返らされた。最終的に獲得されたものなど何一つとして無いのである。かくして、様々な寺院からやって来た私たちの指導者たちは、しばしば私たちにどの様な身の動かし方を教えたら良いのか協議しなければならなかった。経行の時に手をどのように置くか、朝食の前、いつ鳴らし物を叩くのか、法堂から退出する時どこで合掌したらよいのか等々。唯一、絶対的なやり方があるわけではない。しかし、一度それらが決定されたならば、私たちは正確にそれを実践するように指示された。

第二のショック、それは決められたことを1ミリの相違も、1音、1秒の相違も無く実践しなければならなかったことである。しかも翌日には全てが変更され得るのであった。ここで私は理解した。形そのものが重要なのでは無く、精確を期す事が本源なのである。しかし、私は忘れなかった、又決して忘れないことを望むものだが、それはあらゆる動作において自我を放棄し、自己を忘れ去ること。こうした全ての動作、儀式の全てを習うことは、技術の習得とは全く性質を異にする。正しい作法を通し、雲水としての自己を習うこと、即ち自己を忘れ、心身を放下し、それによってこの心身が雲の如く空を飛び、生きた水の如く川を流れるようになる。

今秋、禅道尼苑で3ヶ月間開催されることになった宗立専門僧堂の堂長である今村老師はある日言った、「安居とは、ただ『和』の精神で共に生きることを学ぶのみです」と。『和』と言うものがいかに繊細さの所産であるかをこれ程如実に思い知ったことは未だかつて無かった。この繊細さとは些細な、しかし精確な動作を通し日々培われるものである。

仏法の教えは様々な形をとる。口承もその一つの形であり、3ヶ月間大いにその恩恵を受けた。19人の講師を迎え、約50回の講義を受講することができ、その趣も多彩であった。これらの講義は、私たちの修行について様々な照明を当ててくれたのみでなく、正確な知識ももたらしてくれた。

第1グループの一連の講義が終了した時点で、驚いたことに、私達に筆記試験が与えられた。全員無事にこの関門を突破したものと想像するが。

私たちの師匠からの教えであれ、安居期間中に受けた教えであれ、全て常に再発見され、実践されなければならない。永遠不変の知識、もしくは能力を獲得した印象は毛頭も無い。今村老師は常に私たちに、皆と調和し、皆に従い、既に自分が知っていると思っていることを再び習い、辛い思いをしてようやく獲得習得した習慣さえも、ありのまま受け入れることを思い出させてくれた。

この3ヶ月間を通じ、日本の寺院で実践されている法式が様々であることを認識することができた。日本における多様性と西洋の現実を鑑みた上で、私たちの僧堂である禅道尼苑における法式は、その途上において決定ないし修正された。役寮、講師、日本人研鑽僧の方々は、開かれた精神で真の分かち合いの場に臨み、柔和と忍耐をもって私たちに付き添い、指導にあたってくれた。進退習儀、意見の交換、静寂の時間は、言葉あるいは文化の障害を超越した真の出会いの機会となった。

11月末、故瀧澤前教化部長のお骨を御家族の立会いの下、禅道尼苑の地に埋めました。この紙面を利用し、瀧澤老師の御功績、またそれを受けこの度の安居の実現に携わって下さった全ての方々に、心からの感謝を表明します。

宗教的次元における開花の時

ロベスティ妙仙

イタリア・普伝寺（グアレスキー泰天徒弟）

初めての海外での僧堂安居が、ヨーロッパにおいて、2007年9月15日から12月15日まで開催された。初代ヨーロッパ開教総監であった弟子丸泰仙師の布教に触発された第一世代の師匠たちの弟子、総勢11名が一同に会した。彼らは、四世代にわたる日本人の指導者たちで構成された安居スタッフの用意周到なスケジュールの手にゆだねられた。ヨーロッパ国際布教総監部の今村源宗総監、横山泰賢老師、アメリカからの秋山洞禅老師はそれぞれ堂長、監事、堂監の役職をつとめ、安居の全期間を通して私たちとともに生活をし

た。日本の主要な曹洞宗寺院からやって来た講師や若い僧侶たちは、彼ら自身の僧堂修行を仕上げるため、あるいは向上させるために、交代で指導者スタッフの補佐をつとめた。彼らの存在もまた私たちの修行において重要な役割を担った。

安居の場所は、弟子丸老師が創設した禅道尼苑（フランスのプロワ）であり、そこは伝統的な曹洞禅のやりかたと仕組みによって、集中した状態で僧堂生活をともに送るための、荘厳で私たちを鼓舞するような空間を提供してくれた。私たちは、11月に素晴らしい贈り物として、広い法堂に安置された金色の仏像のように、仏陀や祖師方の慈愛深く見守る眼「仏祖護念」によって支えられていた。この安居は多くの点（私の意見では、現代社会におけるコミュニティに関わる中心的な諸問題に焦点が当たっていたと思う）において幸運な予期しない機会だった。

聖なるものに対する幻滅や世俗化が進行している現代においては、人生における重要な瞬間をたった一人で生きていることが多い。そして、人々はしばしば、存在を構成している宗教的な次元を否定し、はかない満足をその代わりにしている。たいていの場合、そのことがさらなる絶望を増している。宗教的な祝宴のときでさえ、もはや儀式的な式典（それによって個人的、社会的レベルで本来の人間の霊的身体を再生させることができる）で特徴づけられることがなくなり、単なる不安な休息の空間が、あるいは日常生活から気を紛らわせる刺激を求め一種の仕事になってしまった。文化人類学者、神学者、人文科学の研究者たちは、新しい形態や局面において現れている宗教的次元に対する反抗のしるし、あるいは制度外のしるしについて気づいている。なかでも、若者たちの集まりが特にかれらの注目を集めている。しかし、あらゆる局面において、宗教的実践の局面においても、あらゆる世俗的・聖的なものを個人の限られた知見、力、判断に還元しようとする憂慮すべき傾向が現れている。いまや宗教的局面も含めて、あらゆるレベルでの正しい共同体主義的基準を（たとえそれをこころから欲していたとしても）見出すことが困難になっている。あるいはそういう希望をもつことすら難しくなっている。

こうした問題について私が考えるに、その中心的な焦点は、適切な基準・作法・法具を備えた、個人的・社会的レベルでの信頼できる基準となる曹洞禅教団の僧侶による、ヨーロッパ共同体を確立することでなければならない。2007年のこの安居は、曹洞宗が資金と熱意を惜しみなく

投入してくれたことにより、こうした展望と、私たちとそれぞれの師匠との関係に対して大きな寄与をもたらした。

ヨーロッパにおける曹洞禅のパイオニア、弟子丸泰仙老師の弟子であった私たちの師匠たちは、この10年間、組織形成の方向に進んできた。しかし、異なったコミュニティが、それぞれの観点から、お互いの分かち合いや協力についてオープンではなかった。今回の安居では、師匠たちのほとんどはヨーロッパの異なった国々の出身であった。日本から来た指導者たちもいた。金子宗元師（東京・曹洞宗総合研究センター）、吉野真常老師（静岡・可睡斎）。また、アメリカからも秋葉玄吾老師（北アメリカ総監）、奥村正博老師（国際センター所長）が参集した。彼らは安居僧との講義や提唱をおこなっただけではなく、修行や法要にも参加した。彼らと安居僧との関係は休憩時間や食事の時間にも広がり、それは個人間、文化間のレベルでお互いのことを知るよい機会になった。集中し落ち着いた協力的な雰囲気なかで、そのときどきで起こった問題を解決したり、作務をどのように計画し指示するかなど、実践的・理論的な問題についての生産的な対話が、指導者と安居僧との間でいつもおこなわれていた。

与えられた状況下で、規則や教えなどを習得、体得するには、修行におけるガイドラインが必要であると感じた。実際、最初の段階では、日本からみえた研修僧（永平寺、總持寺、愛知専門尼僧堂など異なる道場で修行した、あるいは現在も修行中の）の間で、スタッフと安居参加者の間においても意見の違いがあつた。ある特定の状況において、その状況を最上の方法で改善するためには、最適の儀式的形態はどのようなものでなければならないかについて、たとえば、空間の配置、使える法具、安居僧の許容力と能力といったことについての、大変興味深い意見の一致によって決定されていた。

そのことで私たちは、儀式的の正しい意味が完全に実現できるような表現を見出せるように、可能な修正をし、ときには提案するということができたのだ。

行鉢は、こうした立案のしかたについての諸問題を考えるための意味深い実例であった。それは、受食者だけでなく浄人にも、食材そのものにもまざる音と読経、リズムと作法を伴って、壇上にある聖僧に料理が奉じられる儀式的な所作であり、皆で一緒に食事をいただくことの宗教的な意味合いと象徴的な言語を感得する機会であった。お粥が入っている入れ物を支える必要性、お粥がさめないように

するやり方、存在する食材で食事を調理すること、台所と僧堂を結ぶ屋外の道に沿ってそれらを運ぶこと（しばしば雨の中を）、こうした事柄は各人の異なる感受性を調和させて、うまく機能する浄人のチームを作り上げるという協力的な態度を養う機会となった。

宗教的なコミュニティとして成長するというこのプロセスは、ほんの始まりを迎えたばかりであり、このプロジェクトにおいては、今後それぞれの禅センター内での、そして他の禅センターとのつながりにおいて、一緒に直面すべき優先的な問題がなんであるかを見出すための研究と洗練、情熱的な議論と経験が要求されている。しかし、もし、このたびの安居で培ったような精神と処理能力をもって、今回修行したような方向にむかって継続的な努力を続けるなら、法堂にかけられた弟子丸老師の書「（仏の）聖なる座は大地と星と天空に平和をもたらし、千秋に亘ってこの法の城のそびえる国を守護する」が表した願いにあるように、それはきっと実現されるだろう。

2007年宗立専門僧堂安居について

ヴァン・ルーベン仙行

フランス・行仏寺（レッシュ雄能徒弟）

第1回宗立専門僧堂の開催と、私がそれに参加することは、それが実際に開始される直前に決定されたことだった。ヨーロッパで禅の普及が始まって40周年を記念する法要とシンポジウムが禅道尼苑において開かれていたちょうどそのとき、私の師匠からこの安居に参加するようにと告げられたのだ。最初、私はその申し出を辞退したのだが、師匠から再度言われて同意することにした。辞退したのは、その安居では禅修行のためにやらなければならないことがたくさん計画されていたし、直前になって言われても、さまざまな世事（仕事や請求書など）に関わっているために、時間のやりくりが容易ではなかったからだ。それにわたしの72歳になる父親が拡散性の大腸がんと診断されたばかりだったこともある。だから、タイミングが悪かったのだ（ものごとというものはそういう場合が殆どなのだが...）いろいろな世事への関わりをキャンセルすること、そして私の代わりにそうしたことをやってくれる誰かを見つけることは、もうすでに私の安居の始まりであった。死が近い

父を見舞いにいき、別れを告げることに、それが次にやるべきことだった。父とは何度か話をするのができ、父が安らかに逝けるようにと願ったあと、私は禅道尼苑へと向かった。

次の日、それは安居の第1日目、父は亡くなった。その後、私の姉はそのことで私を責め、今もまだ私が葬儀に参列しなかったことを恨んでいる。最初から、私は18年前、僧侶として得度したときに選んだ誓いに直面してしまったのだ。菩提心が成就するように惜しみなく与えるとは何を意味するのか？出家得度の存在の重要性とはなにか？宗教的生活を簡素に生きたいという私の大きな願いに対して私はどのような比重を与えているのか？私の注意をそらし、人生や社会に多大の苦しみと欲求不満をもたらす観念的な、あるいはロマンティックな欲望によって、この深い願いが、いつ、そしてどのようにして、あいまいにされ遠くに押しやられるのだろうか？

日本国外において初めて開催される正式な曹洞禅の僧堂修行、この歴史的な出来事に参加することができたことは、私にとって大いなる栄誉であり、恩恵であると思っている。私はそこで大きな宗教的経験を得ることができた。この出来事を実現してくれた日本、そしてヨーロッパのすべての人たちに深い感謝の念を感じている。かれらの絶え間ない修行のおかげで、私たち11名は僧堂という環境において道を行ずる喜びを経験することができた。すべての衆生を救うという、何年も前に受けた菩薩の誓願を通して、仏法の修行のこと、またそれをすべてのものの利益のために修行できるということを知って、遠い過去、あるいは近い過去における祖師たちへの感謝の念が、さらに強く大きくなったのを感じている。今後の世代の僧侶がおこなう修行にとってこの出来事はとても重要な意味をもっている。それが最終的に成功するなら、願わくは、この地球のさまざまな大陸に、永続的で実質的な修行のための僧堂が設置されるようになるだろう。私たちは規則によって、安居期間中僧堂を出ることができなかつたし、買い物をすることもできなかった。菩提心という最初の願心は継続し、期間中ずっと私たちを刺激し、この存在のよりあいまいな部分を探求するように促した。それは、この修行期間の宗教的な質をこの上なく向上させた。制限と許容のほどよいバランスが堂長老師によって絶えず生み出され、身心を損ねようとする過酷な苦行的環境に埋没することを免れさせた。身心を統一するデリケートな平衡状態は、優しく平穏なやりかたで、道の修証に対する障害（われわれの古くからの習癖）

をすべて取り除く。これら二つの側面は自分や他者への慈悲と智慧を、さらに発達させるための基盤なのである。それはまた人間として、また僧侶として、人生において細心の注意を要する、なくてはならない特質でもある。

大変美しい禅道尼苑という場所は、当然のことながら、この安居中の生活をありがたいと感謝する大きな理由であった。そこでの生活と自然から生まれる大いなる喜びは全般的な驚嘆、魅惑以上のものがあった。

同時に、この一時的な修行道場において従うべき規則を確立することに参加し、それを観察することは私にとって大変価値のあることだった。そのことによっていくつかの規則について、それがなぜ必要なのか、それらに内在している柔軟性と精妙さ、それらが要求する精神のオープンさ、を理解することができるようになったからだ。他の僧侶たちとともに学び、自分が慣れ親しんだのとはまったく異なる役割を果たすことは、「確実性」、自分の修行の癖を抑制し、まったく違った色合いで生きるという初心をもたらすものだった。

安居のすべては、日本の僧堂や寺院の古い伝統に基盤を置いたものであったが、私たち西洋人の習慣に適合させるために、あらかじめ多くのことが施されていた。そのことによって禅修行と修行僧の生活が持っている普遍性が証明されていた。道元禅師の清規は、もし人が字句それ自体に固執しておらず、仏法を見事に特徴づけているオープンで柔軟な精神をもって運用するなら、それは普遍的なものである。一群の規則や場面設定を、日本からヨーロッパへとまるごと移すべきだというのなら、あるいはそれとは逆に自分自身の評価と都合でそれらを勝手に変えたいというのなら、それは真正な禅修行の永続的な発達にとって無益であり、危険なことだということを今回の安居はありありと示していた。この伝統のなかで生まれ育った人たちとの相互的な相談は、如何にして規則を適合させ改変すべきかを考え、しばしば知的な思考力を超えたところにまで深まっていった。それは自分たちのやりたいようにそれをするという傲慢さを手放すことであり、あるいは一方では、本質的なことを伝えるための文化間の架け橋を理解することができない、硬直的で保守的な精神に盲目的に従うことを放棄するということだ。私たちの間にかもしだされていた全般的な感情は、外国の伝統の深遠さに感動しつつ、それでいながら普段の自分の習慣で動いているかのような安らかさを感じる、といったものであった。突然、私は日本に

行く可能性がないことをもはや後悔しなくなった。日本がここに来ているのだから！今はもうかつてのような、日本に行って修行したいという衝動を感じない（修行のための僧堂が永続的なものならば）。しかし同時に、ここに留まるという理由もない。安居の最初の夜に表明された、「和合」を実現したいという乙川教学部長の最初からの願いは、真実なものだと感じられた。安居参加者が一体となって活動しただけでなく、「西洋」と「日本」の禅修行もまた一体となっていた。

教学については、日本、アメリカ、ヨーロッパから数人の教師を招いて多大の努力がなされた。翻訳に関しては講師・通訳・安居僧のそれぞれにおいて困難を感じることもあり、講義の量（50回）もいくぶん多かった。今村堂長の教えは明快で、普通の言葉をはるかに超越していた。彼自身の修行を私たちの修行に親密に伝えていた。彼は一言も言わないで私たちの修行の核心に触れることができたのだ。もっとも印象深い教えは、自分が是認できないことでも受け入れるという彼の態度だった。そのことは私たち自身の内部から自分の修行についても持っている感情を、もっと伝統の基本に忠実になるような方向に変えさせた。安らかさと幸せの法がますます現れ出ていった。それはきっとこの大陸における将来の修行と、禅の普及の強化に大きな寄与となるだろう。日本の伝統に基礎を置きながら、それをヨーロッパ各国の特徴に適合させ、真正の禅修行はこれからの何世代にもわたる人々に影響を与えていくだろう。そして、仏法、道元禅師や瑩山禅師によって創設された曹洞禅の修行が、それとわかる形をとって世界に広まっていくだろう。

私は自分の関心事（法と社会や家族の状況にとって有益であり差し迫ったいろいろなこと）にあまりぴったりではないことをやろうという選択をした。それについて、私の周囲にいる多くの人たちは、まったくの時間の無駄だ、と言った。私は進化、放棄、核心へ向かう動き、霊的・宗教的利得を観察する。言葉とそれがもつ内在的な二元論をわきへ置くこと！信頼、老師や同輩に対する信任がある。それは完全な自由を与えてくれた。

要するに、人生について言うことと同じことが安居について言えたのだ。それは長く、あるときにはとても困難だった…。しかし、それは素晴らしいものであり、あまりにもはやく過ぎ去る。人はそれを不愉快なものに感じるかもしれないが、その3ヶ月を道を行ずるために過ごすという選択をすることもできる。30年という時間の幅において3ヶ月間

の修行はどんな意味を持っているのだろうか？時間の尺度の上ではたいしたものではないだろう。しかし、それは、なにひとつとして実体的なものを見出すことができない人の深部へと去来することを可能にしてくれるのだ。それは、これからの30年を培ってくれる基本的な宗教的経験になる。

それは神話や神話的なものを破砕する。

今ここにとどまること。

合掌

正法眼蔵坐禅箴 自由訳

藤田一照

次のことはよくよく心に命じておくべきだ。仏道を学ば上でもどうしてもはずしてはならないこととして決まっている参究のありようがある。それは初心者であろうがベテランであろうがいやしくも修行者である限りは坐禅に力を尽くすということだ。

その坐禅を修行するうえで手本・よりどころとすべき根本の趣旨は、「仏に^な作ることを求めないで仏を行ずる（＝坐禅すること）」ということである。行仏すなわち坐禅を実践している姿はそれ自体で完結していて、それとは別にいまからあらためて仏に^な作ろうと努力しているのではない。だからそこにはなにひとつ欠けたものがない真実の姿がそのまま現在のありようとして生き生きと立ち現れている（公案見成）のだ。身をもってすでに仏を実際に行じているのが坐禅であって、そこには作仏というような余計なものはからいがいまさら入り込む余地はまったくない。坐仏が原因で作仏が結果という前後二つに分かれた見方をしてはならないのだ（坐仏と作仏の^{あご}不回互）。

しかし同時に、鳥や魚を捕まえ閉じ込めておく籬や籠のようにわれわれを束縛し自由を奪う囚われた考え方（二元論的考え方）を打ち破るなら坐仏（＝行仏＝身仏＝坐禅）が作仏をすこしも妨げない、坐仏が作仏そのものであるといても少しも差し支えないのだ（坐仏と作仏の^{あご}回互）。

言葉や概念の束縛から離れてまさにこのような自由無碍さが実現しているとき（回互と不回互の脱落）には、大昔から今にいたるまで、いつでも坐禅には仏の世界にも魔の世界にも自由に入る力がそなわっている。また歩を進めることにも退くことにも、そしてあらゆる溝や谷に満ち渡るだけの大きさを持っている（『弁道話』参照）。

《以上が第一段で 曹洞宗の法脈に属する薬山非思量の話とそれについての道元の解説が終わる》

以下に臨済宗の法脈に属する南嶽磨博の話を引き、臨済の系統においても本来の坐禅はこのようであったといわんとする。結局、両宗においてもその源流のところでは同一の正しい坐禅が行じられていたことを示そうとしている。

《以下で、いわゆる「南嶽磨博」の話を引きさらに正しい坐禅のあり方を参究する》

江西大寂禅師、すなわち馬祖道一（709 - 788）は南嶽大慧禅師のもとで仏道を学修していた。（「江西大寂禅師」と敬称を用いていることから道元禅師が馬祖をたいへん高く評価していることがうかがわれる）さて、馬祖は禅の伝統をしっかりとして体得して師から親しく心印を受けて以来（師資相契 = 本当に道を得て師匠と通じ合ったのち）たえず坐禅をしていた。だから先にも批判しておいたように「坐禅は初心の者のする修行だ」などという見解があやまりであることは明らかだ。つまりこの後に展開する二人の問答は、馬祖が坐禅を誤解して作仏するつもりで坐っているのを師匠の南嶽がいましめたというような浅い話ではない。どちらも坐禅の真髓を本当に究めた対等の者同士が互いに協力し合って真の坐禅を表現し浮き彫りにしようとしている話として理解しなければならないのだ。だから道元禅師は、先の薬山と僧の話のように、この二人の対話もいわゆるの質疑応答ではなく坐禅についてそれぞれの立場から語を換えて坐禅についてぎりぎりのところを語り合っているものとして考察している。

あるとき、南嶽が馬祖のところへ行って次のように話しかけた。

「そなたは（「大徳」は第二人称の代名詞で尊公、貴師の意 師が弟子に使うにしてはていねいすぎる敬称であることに注意せよ）そうやって一生懸命坐禅をしているが、

それは「什麼（なに）」という疑問詞を使ってしか指し示すことができないものの図（=具体的な立ちあられ、姿形）なのだ。この「図」という漢字はいまある現実とは別ななにかを思い描くという意味の「図る（「意図」）」ではなくいわば「姿形」という意味の「図（図形）」として理解されなければならない。だからこの一文は「坐禅の図は箇の什麼なり」と読むべきである）」

この問いを静かに落ち着いて思い巡らし、実際の坐禅を通して参究しなければならない。なぜならば、坐禅をさらに上に超えたなにかをめざすような意図があるのか？、坐禅の外側になにか別に意図すべきことがあってそれがまだ言い表されていないのか？、あるいはそのような「上」とか「外」といったあらゆる意図をもってはいけないのか？。坐禅しているそのときには、どのような図がそこに現成（完成）しているのかと問うているのか？このように審らかに考えてみるべきである。

（龍が大好きで龍の彫刻や画をたくさん集めて部屋に飾っていた葉公のところには本物の龍が現れると気絶してしまったという故事がある）彫刻の龍（=坐禅）を愛するレベルからもっと進んで本物の龍を愛するべきだ（=作仏）。しかし、彫刻の龍にも本物の龍にもともに雲を呼び雨を降らす能力があることを学ばなければならない。遠いもの（=作仏）を貴いとしてはいけない。遠いものを賤しとしてはいけない。そうではなく、遠いものに慣熟（ものごとに通じて）精通していつがけないこと、熟達・熟練しなければならぬ。また近いもの（=坐禅）を賤しとしてはいけない。近いものを貴いとしてはいけない。近いものに慣熟しなければならぬ。目で見ていること（=近）を軽んじてはいけない。目で見ていることを重んじてはいけない。耳で聞いていること（=遠）を重んじてはいけない。耳で聞いていることを軽んじてはいけない。どちらにも偏ることなく耳も目も聡明にしなければならない。以上が南嶽の問いに対する道元禅師のコメントである。

さて、馬祖が答えた。「はい、確かに坐禅は仏に作っている（成仏）図です（作仏の図）」

この表現を明らかに理解しそれに通達しなければならない。ここで言われている「作仏」という表現はどのようなことがあっても言われなければならないことなのだ。それは坐禅によって自分が作仏されることを言っているのだ。

また自分が坐禅という仏を行じて作仏していることを言っているのでもある。さらに、仏の具体的な姿がそのときそのときで一つ、二つと出現していることを言っているのでもある。「図作仏」は身心脱落(空)の姿そのものであって、脱落した身心が作仏の図となっているのでもある。このように作仏という事実にいろいろあり方があるのだが、この坐禅という図に引きずられ、それにからまりあっていくこと(葛藤)を図作仏と言ったのだ。

だからこのことはよく承知しておきなさい。馬祖の言ったことは、坐禅はかならず図作仏だということだ。坐禅はかならず作仏の図である。そしてその図は作仏よりも前でなければならぬ(坐禅によってわたしが作仏されるのだから)。またその図は作仏よりも後でなければならぬ(わたしが坐禅することで本来作仏という事実を実証するのだから)同時にその図は作仏のまさにそのときのことでもある(坐禅において仏の具体的な姿がそのときそのとき出現しているのだから)

さてここで次のような問いを立ててみよう。

この一つの「図」つまり、一つの坐禅の具体的な姿形には、どれほどの量の「作仏」がまとわりついている(「葛藤」)のだろうか?坐禅の当体は坐禅している当人が意識できる個別的な体験内容にとどまるものではない。実はそれと意識できてはいなくてもあらゆる「作仏」がこの図にはまとわりついているのだ。まとわりつきにさらにまとわりつきがまとわり続けることによって坐禅が坐禅として継続していく。そのときには、あらゆる作仏の一枝一葉であるまとわりつきは、かならずあらゆる作仏の当体そのものであり、一枝一葉がすべて一つ一つの図として現成している。一図、すなわち坐禅が作仏そのものであるというからまりつきを回避することは

不可能である。それをあえて回避しようとするなら、つまり坐禅と作仏を切り離してしまったら作仏はたちまちいのちを失ってしまう。しかしいのちを失うということもまた、一つの図としてあるのだ。

すると南嶽はひとつのかわらをとり上げて石の上にあててそれを磨ぎはじめた。そこで大寂=馬祖は南嶽に問うた。

「師よ、それは何と疑問詞でしか指すことができない何とも限定できないところを実際にただやるのみということを示そうとして、かわらを磨いておられるのですね!(表面的には「師よ、それは何をなさっているのですか?」と質問しているように聞こえるが、道元禅師はそうはとらないことに注意)

たしかに、この南嶽の行為は誰が見ても「かわらを磨いている」と見ない人はいないだろう。しかし、それはものごとの表面だけを見ているのであって、真の意味での磨埴として見ている人はだれもいないだろう。だからこそ(「しかあれども」という語は道元禅師の場合、逆接ではなく「しかあれば」という意味で使われることが多い)磨埴は馬祖がやったように「作^{そしも}什麼」という問いの形で言い表されてきたのである。「作^{そしも}什麼」としか言いようのない、いかなる限定をも脱した行=坐禅は、かならず磨埴というありかたをしているのだ。この娑婆世界と他の世界とは異なっているが、このような意味での磨^わは決して止むことがないという道理があるのだ。自分の見たところだけをもって自分は確かに見たのだからなどと決め付けてしまわないだけでなく、いろいろの成^わす業には謙虚に学び取っていくべき根本的な趣旨があることをはっきりと思い定めることが大切である。

続く)

ニュース

2008年1月5日

大本山永平寺78世貫主宮崎奕保禅師猊下が遷化された。享年108歳。法臘92歳。本葬は2008年4月5日に大本山永平寺にてとりおこなわれる。

福山諦法禅師猊下が大本山永平寺79世貫主にご就任された。晋山式は2008年4月5日に大本山永平寺にてとりおこなわれる。

国際ニュース

北アメリカ曹洞禅連絡会議および研修会

場所：カリフォルニア州ロサンゼルス 禅宗寺
日程：3月9, 10日